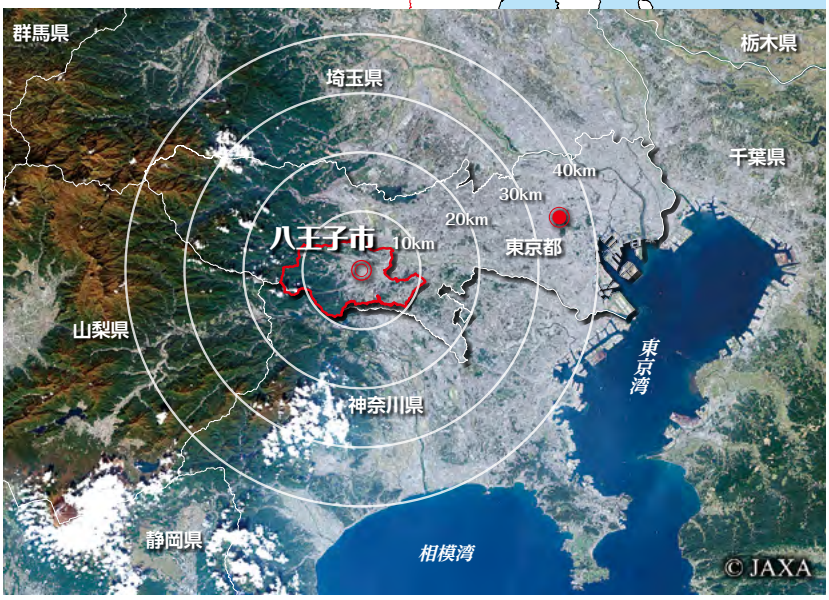
第1章　八王子の概要

1. 社会環境

(1) 位置

八王子市は、東京都心から西へ約 40 キロメートル、相模湾からも北へ約 40 キロメートルの位置にあり、神奈川県との都県境、関東平野と関東山地との境界部に位置しています。関東山地を望む西側の海抜は最高 862.7 メートル、関東平野に広がる東側では最低 63.0 メートルで、約 800 メートルの高低差があります。市域は東西約 24.3 キロメートル、南北約 13.4 キロメートルの広がりを持っており、面積は 186.38 平方キロメートルと東京都内では奥多摩町に次ぐ面積を有しています。



八王子市の位置

(2) 沿革

交通の要衝として古くから栄えた八王子は、戦国時代には、小田原北条（ほうじょう）氏の一門である北条氏照（うじてる）の本拠地として、滝山城下の滝山町周辺や八王子城下の元八王子町周辺を中心にまちが形成されました。八王子城落城後、江戸時代初めにかけて甲州道中が整備されると、江戸幕府の代官頭大久保長安（おおくぼながやす）が武蔵国多摩郡横山村*に宿駅を開き、以後、甲州道中最大の宿場町として発展していきます。また、八王子は古くから「桑都（そうと）」と呼ばれ、養蚕業が盛んな地域として知られており、江戸中期ごろから生糸や絹織物が盛んに商われていました。

明治 4 年（1871 年）の廃藩置県を経て、翌年には現在の市域に含まれる全地域が神奈川県に移管されます。明治 11 年(1878 年)には、神奈川県に 1 区 14 郡が誕生し、八王子市域は南多摩郡に統括されます。このとき、禅東院（ぜんとういん）（本町）内に南多摩郡役所が置かれています。その後、明治 22 年（1889 年）の市制・町村制施行により現在の市域の基となる八王子町・小宮村・横山村・元八王子村・恩方村・川口村・加

*** 武蔵国多摩郡横山村**
ここでいう横山村は、現在の中心市街地周辺を指す地名。明治 22 年（1889 年）成立の横山村とは異なる。

住村・由井村・浅川村・由木村が誕生し、このころになると、八王子町を中心に近代化が加速します。紡績・金融・保険などの会社が次々と設立され、現在の JR 中央線に当たる甲武鉄道の新宿―八王子間が開通、八王子電灯や八王子瓦斯といった都市の基盤を担う会社も設立されていきます。

明治 26 年(1893 年)には多摩地域が神奈川県から東京府に移管されます。その後、明治 34 年（1901 年）の中央線八王子―上野原間の開通、大正初めごろの乗合自動車（路線バス）の普及などを経て、八王子町は大正６年（1917 年）に東京府で東京市に次いで２番目に市制を施行します。以後も、玉南電気鉄道東八王子駅（現京王八王子駅）の開業や八高線の開通、高尾山ケーブルカーの開業、武蔵中央電気鉄道（路面電車）の開業など、鉄道網の整備充実が図られ、一方では都市計画法の適用による区画整理事業や風致地区の設定など、近代都市・八王子のまちづくりが進められました。

市制施行後の市域の変遷

昭和 16 年（1941 年）の小宮町との合併に始まり、戦後には８町村と相次いで合併して、昭和 39 年（1964 年）までにほぼ現在の市域が形成されます。戦後の八王子の織物業界は「ガチャ万」といわれるほど隆盛を極めますが、昭和 40 年代になると、国内の繊維産業の衰退とともに規模を縮小していきます。それに代わり、北八王子工業団地などの工業団地が造成され、精密機械や電子機器の関連工場が進出しました。現在では、精密機械加工に加え、ナノテクノロジーなどの先端技術産業が集積するほか、ソフト系 IT 産業の一大集積地となっています。

こうした流れの中、昭和 40 年（1965 年）ごろになると「多摩ニュータウン」をはじめとした、首都圏のベッドタウンとしての住宅開発が市内各地で行われ、八王子市の人口も急激に増加します。この時期には、京王高尾線や京王相模原線の開通、中央線東京―浅川（現高尾）間の特別快速の運行開始、中央自動車道の整備など、輸送力も増強されました。また、大学をはじめとした高等教育機関が首都圏郊外の八王子市に次々と移転・新設され、現在では 21 の大学・短期大学・高等専門学校

が集まる国内有数の学園都市となりました。

観光面では、近代以降、日帰り観光地として、山地や丘陵地の史跡、自然を利用した観光開発が進められました。中でも高尾山は、自然豊かな場所が大都市近郊にあるという点が評価され、平成19年（2007年）に「MICHELIN VOYAGER PRATIQUE Japon」で三ツ星観光地に選ばれ、現在では、世界的な観光地として国内外から年間300万人ともいわれる登山客が訪れています。

平成27年（2015年）に都内初の中核市へ移行し、平成29年（2017年）には市制100周年を迎え、人口58万人を擁する多摩地域最大の都市として、発展を遂げています。

ア　姉妹都市

八王子市は、これまでに八王子千人同心や北条氏照とゆかりのある、歴史的につながりの深い4つの都市と「姉妹都市」の盟約を結んでいます。

なお、八王子市、苫小牧市及び日光市、並びに、八王子市、小田原市及び寄居町は、3都市が相互に盟約を結び、全国でも珍しい「三姉妹都市」となっています。

姉妹都市の位置

●苫小牧市（北海道）

苫小牧市とは、江戸時代後期に八王子千人同心が北辺警備と開拓のため勇払原野に移住した縁から、昭和48年（1973年）に姉妹都市の盟約を結びました。

●日光市（栃木県）

日光市とは、江戸時代に八王子千人同心が日光東照宮などの火の番を勤めた縁から、昭和49年（1974年）に姉妹都市の盟約を結びました。

●小田原市（神奈川県）

小田原市とは、北条氏照の兄で小田原城主でもある、北条4代当主氏政との縁から、寄居町とともに平成28年（2016年）に姉妹都市の盟約を結びました。「小田原北條五代祭り」「元八王子北條氏照まつり」の相互参加など、活発な市民交流が続けられています。

●寄居町（埼玉県）

寄居町とは、北条氏照の弟で鉢形城主の氏邦との縁から、小田原市とともに平成28年（2016年）に姉妹都市の盟約を結びました。「寄居北條まつり」「元八王子北條氏照まつり」の相互参加など、活発な市民交流が続けられています。

イ　市の木・花・鳥

●市の木「イチョウ」・市の花「ヤマユリ」

市の木と市の花は、市制 60 周年記念事業の一つとして昭和 51 年（1976 年）10 月１日に制定されました。イチョウは、甲州街道のイチョウ並木など市民の目に映った八王子のイメージを代表するものとして圧倒的な支持を得ました。ヤマユリは、関東地方特産の花で八王子でも多くみられ、身近に感じることのできる代表的な花として選ばれました。

●市の鳥「オオルリ」

市の鳥は、市制 75 周年を記念して平成３年(1991 年)10 月１日に制定されました。ブッポウソウ、ヤマセミ、オオルリ、カルガモ、イワツバメの中から市民投票によりオオルリが選ばれました。

市の木「イチョウ」

市の花「ヤマユリ」

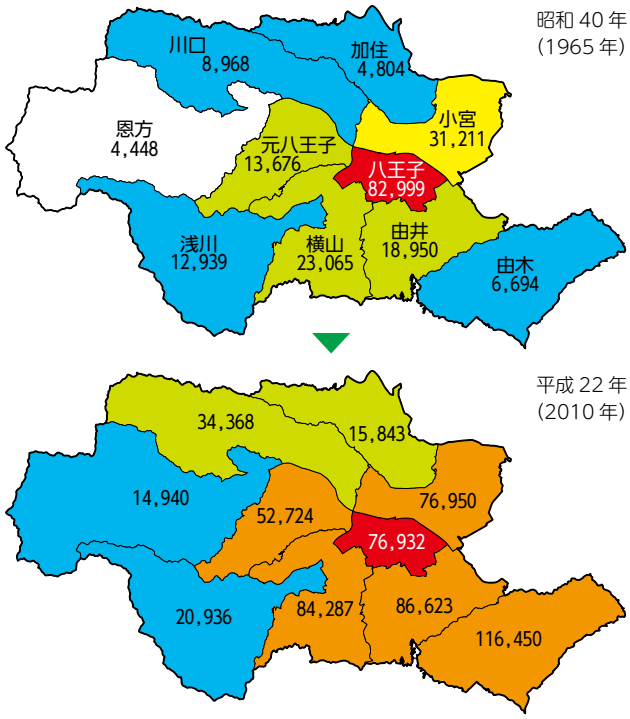
市の鳥「オオルリ」

(3) 人口

国勢調査による八王子市の人口は、おおむね現在の市域となった昭和 40 年（1965 年）には約 21 万人でしたが、その後、多摩ニュータウンをはじめとした住宅開発や大学等の進出などに伴って急激に増加し、平成 22 年（2010 年）には約 58 万人と、45 年間で約 2.8 倍に増加しています。

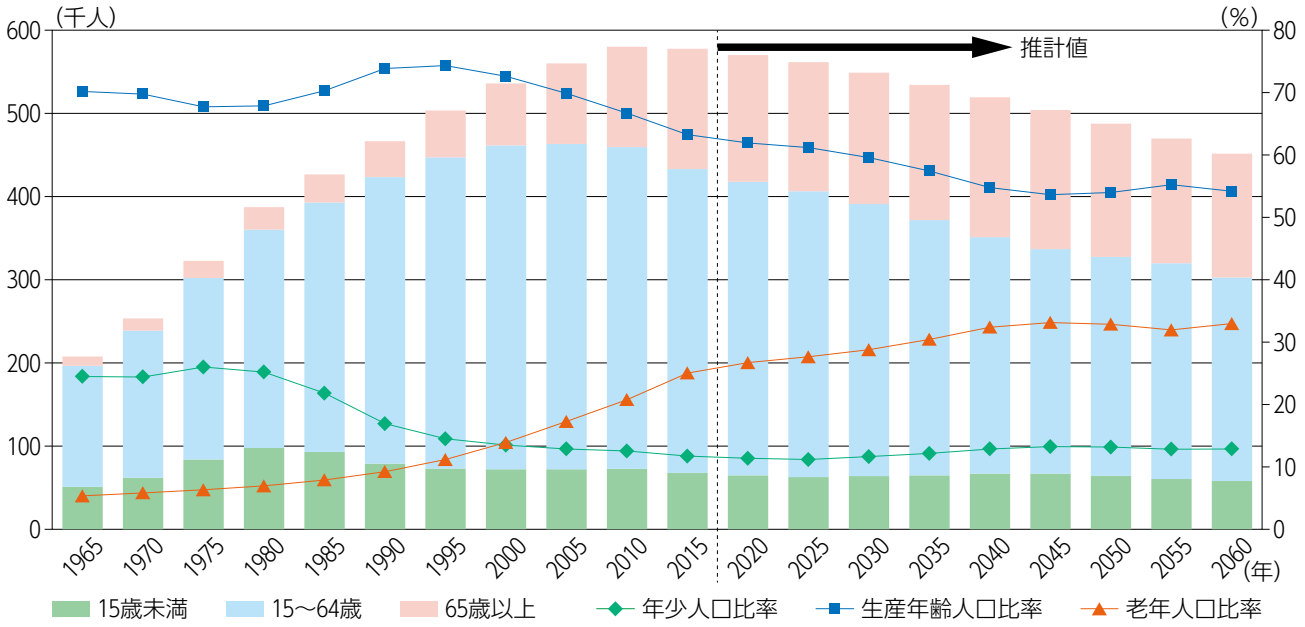
この間の人口の推移を合併前の 10 市町村別にみると、中心市街地（旧市内）の人口密度は一貫して高い水準を保っています。一方で中心市街地を除く地域の人口密度は大幅な増加がみられ、中心市街地の周辺地域では 2.5 倍以上、特に多摩ニュータウンのある由木地域では、17 倍を超える急激な増加がみられます。

その後、本市の人口は、平成 22 年（2010 年）をピークに減少に転じており、令和 2 年（2020 年）以降の推計においても減少し続けることが見込まれます。



合併前市町村別人口及び人口密度の変遷
【『新八王子市史近現代統計資料集　数字が語る八王子の現代』】

こうした人口減少・少子高齢化による地域への影響を見据え、歴史文化資源の活用などによって地域を活性化させ、活動人口（関係人口）を増加させることが重要です。そのことにより本市の新たな魅力が創出され、交流人口の増加、ひいては転出者の減少につながることが期待されます。



人口の推移と推計　【国勢調査、『八王子市まち・ひと・しごと創生総合戦略（平成 30 年改定版）』より作成】

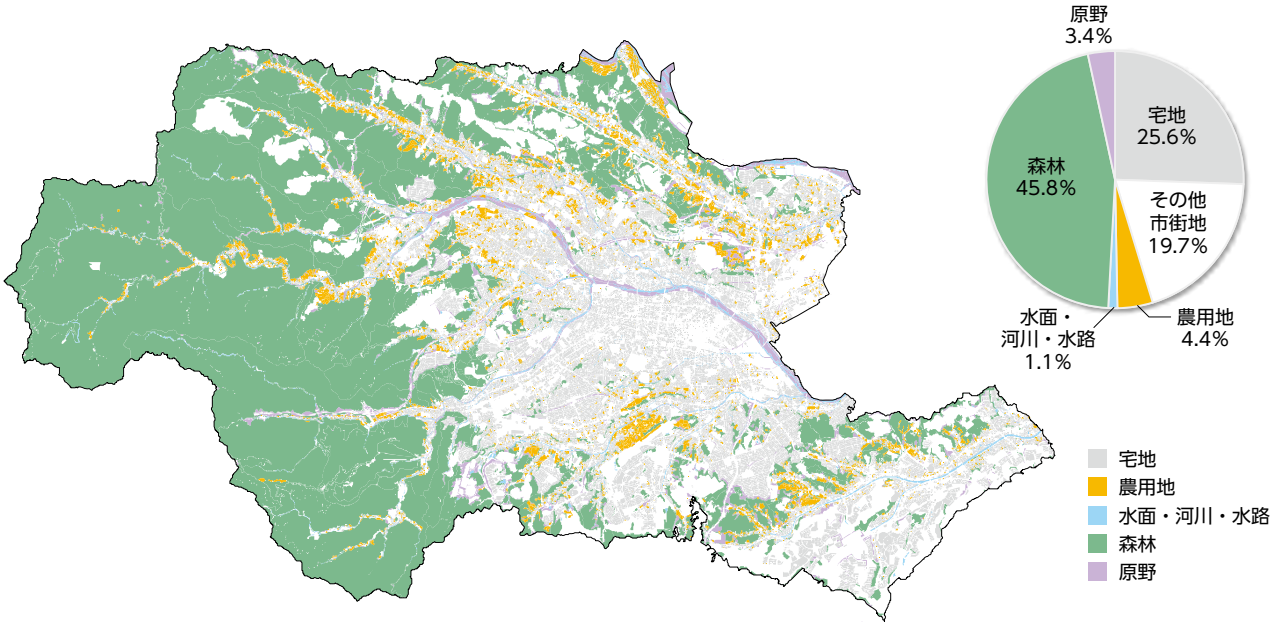
(4) 土地利用

平成 29 年度 (2017 年度) の土地利用現況調査によると、市域の土地利用の構成は、森林 45.8 パーセント、宅地 25.6 パーセント、その他市街地（道路、公園等）19.7 パーセント、農用地 4.4 パーセントとなっています。

森林が占める割合の高さからもわかるとおり、市域には４つの都立自然公園*が広がり、その一部は「明治の森高尾国定公園」（昭和 42 年〈1967 年〉12 月 11 日指定、770 ヘクタール）にも指定され、都心近郊に位置しながら豊かな自然環境を有しています。また、丘陵地には農地が分布しています。

市街地は、市域の中央から東部にかけての台地上に広がっています。JR 八王子駅、京王八王子駅などの主要駅を中心に商業施設が集積し、その周辺を戸建て住宅やマンションなどの宅地が占めています。郊外には７つの工業団地や、21 の大学・短期大学・高等専門学校が立地しており、商業都市・工業都市・学園都市など多様な都市の性格がみられます。

***4 つの都立自然公園**
都立滝山自然公園（昭和 25 年 11 月 7 日指定、661ha）、都立高尾陣場自然公園（昭和 25 年 11 月 23 日指定、4403ha）、都立多摩丘陵自然公園（昭和 25 年 11 月 23 日指定、1959ha）、都立秋川丘陵自然公園（昭和 28 年 10 月 1 日指定、1335ha）がある。



土地利用図と土地利用の状況　【平成 29 年度土地利用現況調査結果より作成】

(5) 産業

市内の事業所数を産業分類別にみると、第３次産業が最も多く、事業所数全体の 82.2 パーセントを占めています。次いで第２次産業が 17.6 パーセント、第１次産業が 0.1 パーセントとなっています。

第１次産業では、消費地が近いことを活かして、多様な農産物が作られています。東京都内としては比較的農家数が多く、都内最大の農業生産規模を持っており、高月町の水田地帯は都内最大の面積を有しています。

第２次産業では、現在の八王子の産業基盤となった織物業において、ネクタイは全国有数の生産量となっています。また、八王子は織物の多品種産地として栄え、その技術は伝統工芸士によって受け継がれ、代表的な５品種が国の伝統的工芸品「多摩織」に指定されています。工業生産において現在の主力産業は、生産用機械器具や電気機械器具などの機械器具製造業で、織物産業を背景に長年培われた「ものづくり」の精神を受け継ぎ、高い技術力が求められる分野の企業が数多く集積しています。

産業分類別事業所数と割合

【経済センサス―活動調査報告（H28.6.1 現在）】

産業分類	事業所数		従業者数	
		構成比		構成比
第１次産業	27	0.1%	250	0.1%
第２次産業	3,204	17.6%	30,832	14.3%
第３次産業	14,949	82.2%	184,666	85.6%
計	18,180	100.0%	215,748	100.0%

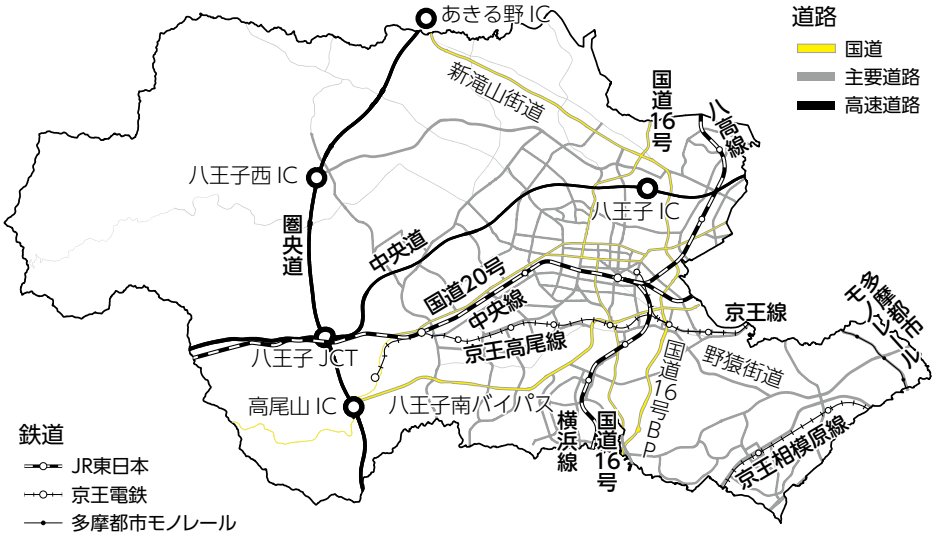
構成比は小数第２位を四捨五入。合計は必ずしも 100%にならない。

第３次産業では、飲食店や医療・保健衛生、社会福祉・介護などの分野の比重が大きくなっています。また、中心市街地や高尾、南大沢、みなみ野の各駅を起点として商業施設が集積しているほか、加住地区には都内唯一の道の駅があります。中でも、南大沢駅近くの大型商業施設や道の駅は、市外からの利用者も多く広い商業圏を持っています。

(6) 交通

八王子市は、都心や横浜から電車で１時間以内の圏域に位置し、歴史的にも絹織物などの交易が盛んであったため、古くから交通の要衝として発展してきました。

道路網のうち広域的なものは、国道 20 号（甲州街道）と中央自動車道（中央道）が東西を結び、首都圏を環状に結ぶ国道 16 号と首都圏中央連絡自動車道（圏央道）が市域の南北を貫通しています。このうち２つの一般国道は、中心市街地で 400 メートル余りの区間を共用しており、中心市街地での交通渋滞の緩和のため、いずれの国道もバイパスが整備されています。



八王子市の主な道路と鉄道網　【国土交通省「国土数値情報」より作成】

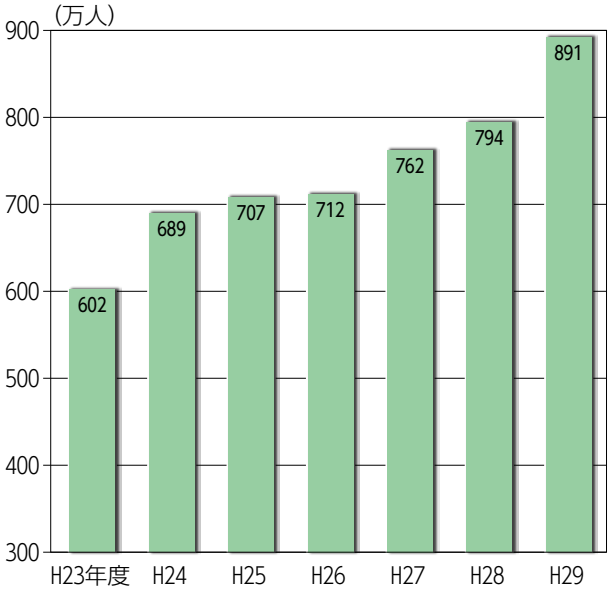
公共交通では、鉄道などの軌道系交通は、JR 東日本（中央線、横浜線、八高線）、京王電鉄（京王線、京王高尾線、京王相模原線）、多摩都市モノレールの３事業者７路線 21 駅があります。路線バスは、京王電鉄バス、京王バス南、西東京バス、神奈川中央交通の４事業者により運行されており、これに加え、八王子市が地域循環

バス「はちバス」を運行しています。

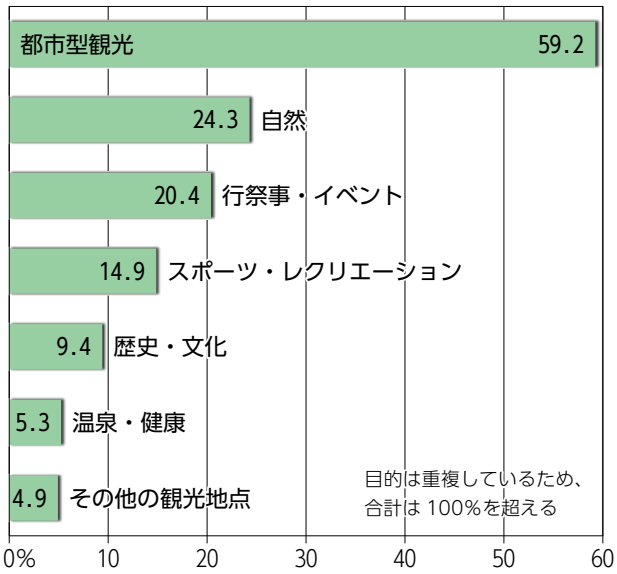
(7) 観光

八王子市を訪れる観光客数は、平成 23 年（2011 年）に東日本大震災の影響で八王子まつりや花火大会などが中止となり一時的に減少しましたが、700 万人前後で推移してきました。近年は「高尾 599 ミュージアム」や「京王高尾山温泉」など高尾山を中心とした観光施設の開館により増加傾向にあります。

平成 29 年（2017 年）の観光客を目的ごとに分類すると、道の駅八王子滝山や三井アウトレットパーク多摩南大沢への買物や食事などを目的とした都市型観光が約 59 パーセントを占めており、次いで高尾山や陣馬山などの自然を目的としたものが約 24 パーセント、八王子まつりや八王子いちょう祭りなどの祭事・イベントを目的としたものが約 20 パーセントと続きます。史跡や博物館､美術館など歴史･文化施設を目的としたものは、約 9 パーセントとなっています。



八王子市の観光入込客数の推移
【産業振興部観光課作成資料より作成】



観光地点の目的別割合（平成 29 年度）
【産業振興部観光課作成資料を再集計して作成】

2. 自然環境の特性

（1） 地形・地質

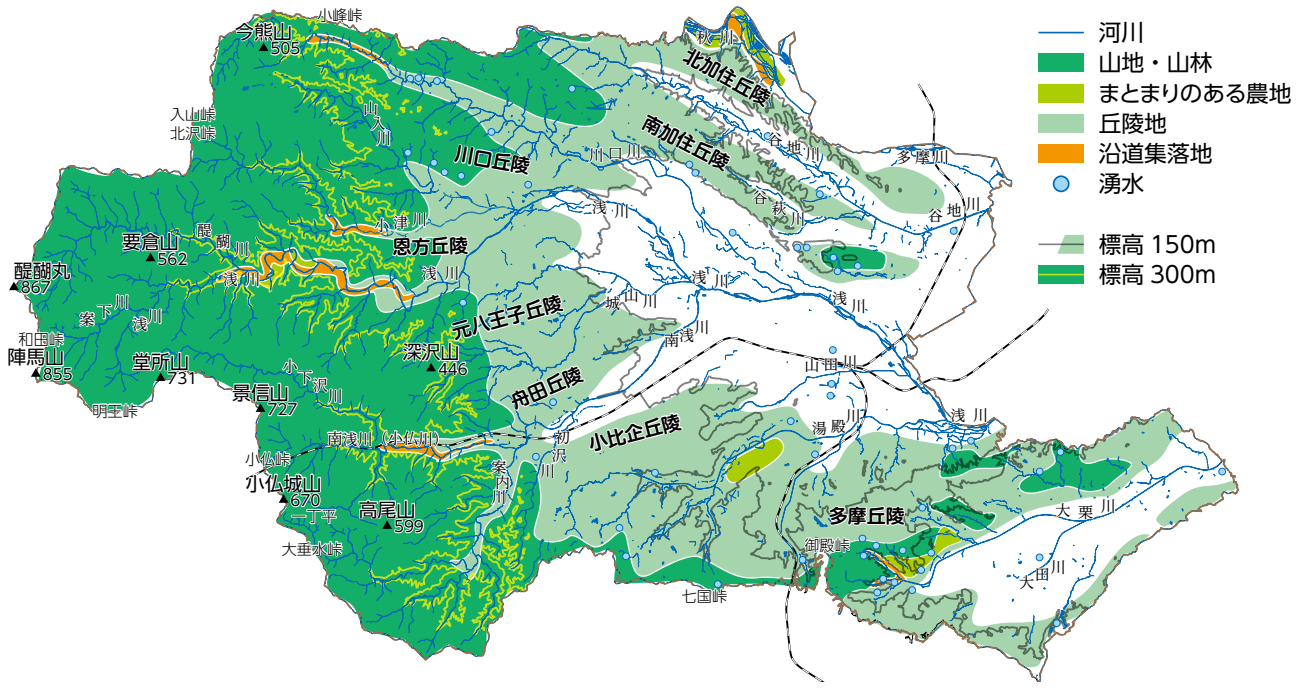
八王子市は、関東平野からその西側の関東山地への移行部分に位置し、関東山地から流下する浅川とその支流に広がる地域であり、山地から丘陵地、台地、川沿いの低地まで、多様な地形と自然環境に恵まれています。

市域の３分の１を占める山地は、市境に連なる最高峰の醍醐丸（867 メートル）や陣馬山（855 メートル）などの標高 800 メートル級の山々から、東に向かって標高を下げて深沢山（八王子城山）や高尾山に続いています。これら山地の地質は南関東に広く分布する小仏層群と古第三紀（1 億 1000 万年～ 2300 万年前）の四万十層群から構成されています。

標高 300 メートル以下の丘陵は、市域の中央部から北東部や南東部に広く分布しており、前期更新世（258 万年～ 78 万年前）の上総層群を基盤とし、その上部に関東ローム層が堆積しています。北部から加住丘陵、川口丘陵、元八王子丘陵、多摩丘陵などがあり、丘陵地は浸食を受けて谷戸と呼ばれる複雑な谷を形成しています。

台地は後期更新世（12 万 6000 年～ 1 万 1700 年前）の河岸段丘であり、この平坦面に市街地が発達してきました。また、低地は浅川とその支流の川沿いや氾濫原であり、水田などに利用されてきましたが、都市化の進展で広く宅地化しています。

八王子市域を流れる河川は、北部市境に多摩川本流が接するほか、西部山地の山



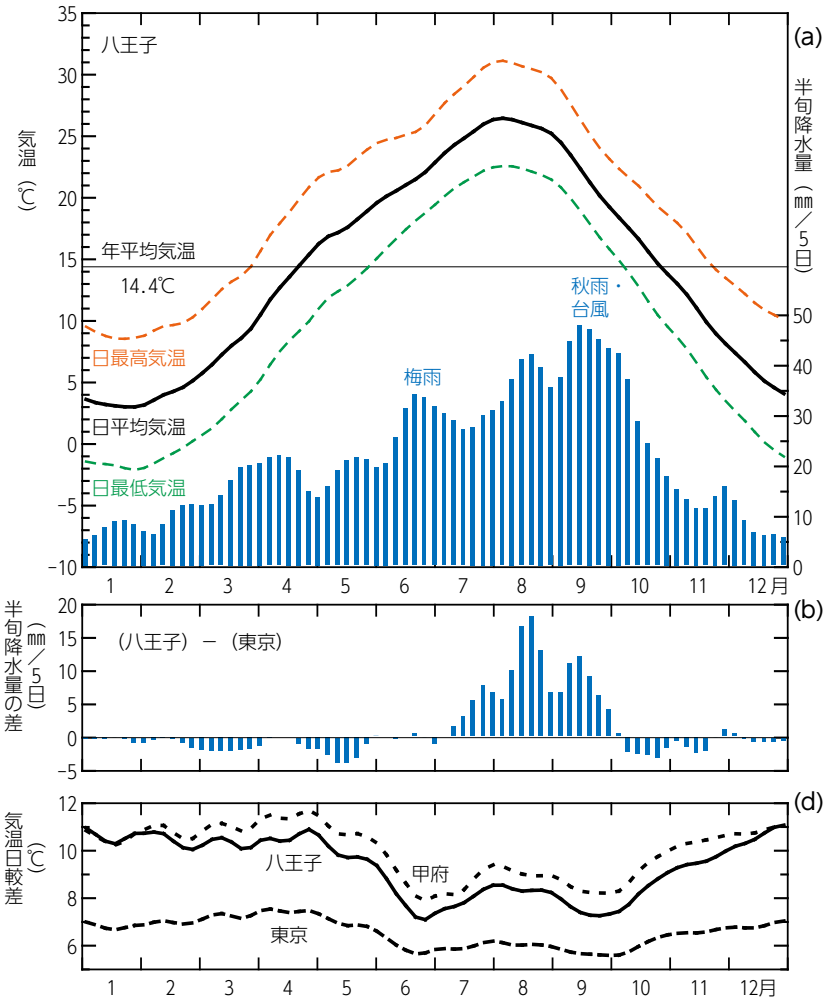
市街地を取り囲む丘陵地と水系の分布　【『八王子市景観計画（平成 30 年 10 月）』より作成】

腹や丘陵谷戸を源流とした谷地川、浅川とその支流、大栗川などが各丘陵の谷間を東流しています。段丘崖（だんきゅうがい）や窪地（くぼち）などには、湧水（ゆうすい）による泉や池、湿地が見られ、各所に潤いのある水辺の景観を形成しています。

(2) 気候・気象

八王子市は、海岸から約 40 キロメートル離れた内陸にあり、海洋の直接の影響を受けにくいため、暖まりやすく冷めやすいという内陸性気候の特徴を持っています。その上、小規模ながらも盆地状の地形であるため、周辺の地域よりも寒暖の差が激しくなる傾向があります。

八王子は、東京都心部と比較して標高が高いため気温は低い傾向がありますが、降水量を比較すると夏は多く、冬は少ない傾向にあり、1 日の最高気温と最低気温の差は八王子の方が大きくなっています。



八王子市の平均気温と降水量　【『新八王子市史　自然編』より】

(3) 動植物相

ア　動物相

八王子市は、山深い山地から里地・里山、そして都市的環境が混在し、また、河川や湧水など多様な水辺により、豊かな自然が形成されています。

市史編さん事業における調査では、ツキノワグマやリス、ムササビなどの森林性を含む 36 種のほ乳類、市の鳥オオルリなどの森林性の鳥を含む 180 種の鳥類、東京を代表する里山の生物種の一つといえるトウキョウサンショウウオやモリアオガエルなど 30 種類を数える両生・は虫類、さらに、

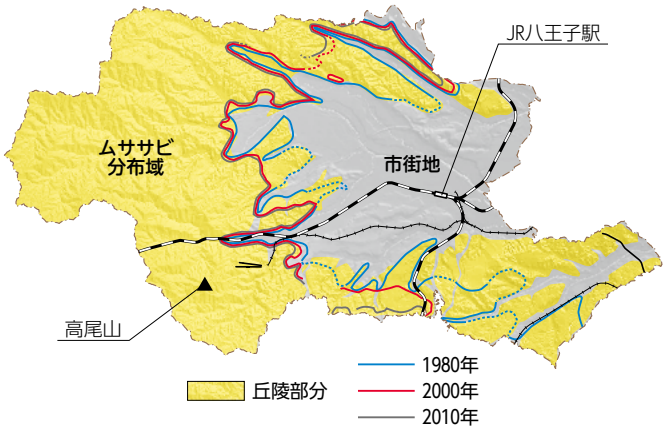
トウキョウサンショウウオの卵塊

スナヤツメ、キンブナ、ホトケドジョウなど44種を数える魚種が確認されています。このことは、八王子の動物相の豊かさが特筆すべきものであることを示しています。

昆虫では八王子全体で約4700種が記録され、トンボの仲間は72種もの種類が確認されています。特に貴重なものとしては、渓流に生息するムカシトンボやモミ林に生息するアオタマムシ、カシワ林に生息するハヤシミドリシジミ、照葉樹林に依存するヒメハルゼミなどが分布しています。里山では、ゲンジボタルやヘイケボタル、オオムラサキやミドリシジミなどの昆虫が生息する環境もまだ市内各地に残されています。なお、ヨコヅナシモフリコメツキをはじめ、クロサヒラタアトキリゴミムシ、タカオキリガなど、高尾山域で初めて発見された昆虫も数多くあります。

ゲンジボタル

八王子を代表するほ乳類の一種として、ムササビが挙げられます。ムササビは、樹木の葉や花芽、種子などを食べ、木から木へと滑空して移動する動物で、その生息にはまとまった樹林が必要です。八王子では、市街地を除き丘陵から山地にかけて広く分布していますが、都市化とともに丘陵地での生息環境は退行しつつあります。ムササビは完全な夜行性で、人間に気づかれないことも多い動物ですが、江戸時代に著された『武蔵名勝図会』には高尾山のムササビが描かれるなど、古くから八王子の人々に親しまれてきました。人の生活圏に接して生活するムササビが生息できる環境を考えることは、「自然豊かなまち八王子」を将来に引き継ぐために大切なことです。



ムササビ分布の変遷　【『新八王子市史　自然編』より作成】

イ　植物相

八王子市は本州中部に位置し、冷温帯と暖温帯両方の気候帯の特性を持った植物相が顕著であるなど、多くの植物が生育する条件がそろっています。市域には2300種を超える植物の生育がこれまでに確認されています。東京都で記録されたスミレ類31種のうち八王子市内だけで26種が確認されており、特にイブキスミレは、都内では八王子だけにしか現存していないスミレです。

八王子を特徴づける植物としては、高尾山で初めて発見されたタカオヒゴタイをはじめ、高尾山で採集した標本をもとに植物学者の牧野富太郎*が発表したオオツクバネガシなどのほか、タカオイノデ、オンガタイノデ、ジンバイカリソウなど、八

*** 牧野富太郎**
高知県出身。「日本の植物分類学の父」とも評される。1862～1957。

イブキスミレ

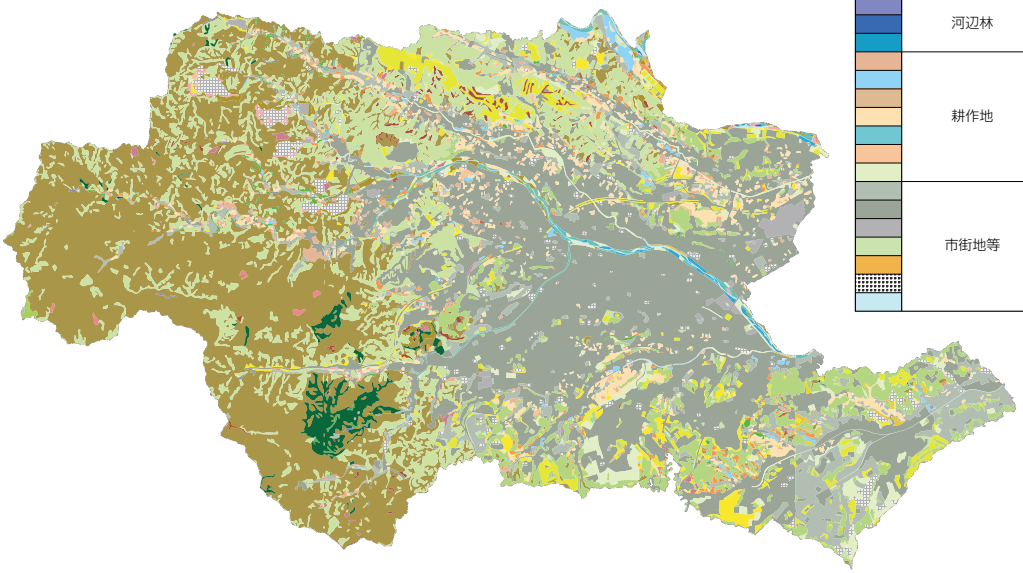
タマノホシザクラ

ハチオウジアザミ

王子の地名を冠した植物も多数あります。近年も、市内の多摩丘陵からタマノホシザクラ（平成 16 年〈2004 年〉）やハチオウジアザミ（平成 24 年〈2012 年〉）などが地域固有の新種として発表され、八王子の自然の豊かさを裏付けるものとなっています。

高尾山は、古くから山岳信仰の対象であり、近代以降は御料林や国有林として、その後は明治の森高尾国定公園として自然が保護されてきたため、今もなお貴重な天然林が残されています。巨木を連ねる杉並木をはじめとしたスギ林とともに、北斜面にはイヌブナやモミを主体とした冷温帯林、南斜面にはツクバネガシやアカガシを主体とした暖温帯林という植生の広がりや、イナモリソウ、レモンエゴマ、ツルギキョウなどの多様な林床植物相が特徴的です。

相観的な区分	環境省　統一凡例
暖温帯針葉樹林	シキミ−モミ群集
落葉広葉樹林	イロハモミジ−ケヤキ群集
落葉広葉樹二次林	オニグルミ群落(V)
	クヌギ−コナラ群集
	クリ−コナラ群集
	クリ−ミズナラ群集
	ミズキ群落
常緑広葉樹林	シラカシ群集
常緑広葉樹二次林	シラカシ屋敷林
常緑針葉樹二次林	アカマツ群落(Ⅶ)
	ヤマツツジ−アカマツ群集
植林地	アカマツ植林
	スギ・ヒノキ・サワラ植林
	その他植林
	その他植林(落葉広葉樹)
	テーダマツ植林
	ニセアカシア群落
湿原・河川・池沼植生	オギ群集
	ツルヨシ群集
	ミゾソバ−ヨシ群落
	河辺一年生草本群落(タウコギクラス等)
竹林	竹林
タケ・ササ群落	アズマネザサ群落
低木群落	クズ群落
	低木群落
二次草原	アズマネザサ−ススキ群集
	チガヤ−ススキ群落
伐採跡地群落	伐採跡地群落(V)
	伐採跡地群落(Ⅶ)
牧草地・ゴルフ場・芝地	ゴルフ場・芝地
	牧草地
河辺林	タマアジサイ−フサザクラ群集
	ヤナギ高木群落(Ⅵ)
	ヤナギ低木群落(Ⅵ)
耕作地	果樹園
	水田雑草群落
	茶畑
	畑雑草群落
	放棄水田雑草群落
	放棄畑雑草群落
	路傍・空地雑草群落
市街地等	緑の多い住宅地
	市街地
	工場地帯
	残存・植栽樹群をもった公園、墓地等
	自然裸地
	造成地
	開放水域



現存植生図　【『新八王子市史　自然編』より】

3. 八王子の災害

(1) 降雨・降雪による災害

ア　河川氾濫・洪水

八王子宿を築いた大久保長安は、宿の建設に際して浅川に土手を築き治水対策を講じました。その痕跡は「石見土手」として現在にも残されており、八王子が河川による水害の危険にさらされていた過去を物語っています。

石見土手（市指定文化財）

八王子を流れる河川の本流となる多摩川の洪水の記録をまとめた研究によると、多摩川の洪水は16世紀から18世紀初めにかけて徐々に増加し、1720年代に急増します。以後増減を繰り返しながら1820年代にピークを迎え、その後は鋸歯状の変動を繰り返します。

洪水が急増した背景には、江戸時代以降の農地の開発があると考えられます。特に享保期（1720年ごろ）以降の新田開発や水利技術の発達により、それまで人が耕地や住居として利用しなかった河川敷や川沿いの土地を利用しはじめたことが影響していると考えられます。

市域での洪水の被害状況の記録に、寛保２年（1742年）７月末から８月にかけて被害をもたらした台風があります。梅坪村などで田畑冠水の被害があったほか、日光火の番を終え帰郷した千人同心が足止めされてしまったという記録も残っています。

現代では、河川改修や護岸の整備など、減災に向けた取組を実施することで、大規模な災害とならないよう対策しています。しかし、昨今では集中豪雨や台風の大型化などの異常気象により、大雨や洪水の被害も多く、道路の冠水や家屋の浸水などの被害が発生しています。

南浅川護岸崩落（H29.10.23）

イ　土砂災害

八王子市は、西部を中心に山地や丘陵、河川によって形成された谷戸が数多くあり、地域によって斜面地の多い地形が集中しています。また、住宅開発や道路建設などにより、人工的に造られた斜面がある場所も多く、土砂災害の危険性が高くなる傾向にあります。

八王子で推定震度５強の揺れがあった、大正 12 年（1923 年）の関東大震災における土砂災害では、恩方村でがけ崩れにより住居が埋まり死者が出ています。そのほか、これまでに集中豪雨や台風などにより、八王子市内の山間地では様々な規模の土砂災害が発生しています。

八王子城跡での土砂災害（R1.10.15）

現在、土砂災害から国民の生命を守るため、平成 12 年（2000 年）に施行された「土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律」に基づき、土砂災害警戒区域の周知と、避難方法について啓発を行っています。

ウ　雪害

八王子市の降雪は頻繁ではありませんが、これまで何度か大雪を経験しています。

上恩方町の積雪状況（H26.2.14）

直近では、平成 26 年（2014 年）２月 14 日から 15 日にかけての降雪が挙げられます。関東・甲信地方では、８日から９日にかけて低気圧が日本の南岸を発達しながら通過したため、広い範囲で大雪や大雨となり、八王子でも積雪がありました。さらに 14 日から 15 日にかけて記録的な大雪となり、本市でも観測史上最大の 50.5 センチメートル（八王子市独自観測）の積雪を記録し、昭和 43 年（1968 年）２月 16 日の最大積雪量 44 センチメートルの記録を更新しました。前の週の雪が残った上に積雪したため、１メートル以上の積雪になったという場所もあり、各地で降雪量を上回る積雪となりました。

この積雪による被害は、倒木や商店街のアーケードの落下、カーポートや農業用ハウスの圧壊などの損壊に加え、ライフラインにも深刻な影響を及ぼしました。停電や鉄道の運転見合せ、路線バスの運休のほか、高速道や一般道でも通行止めが発生し、中心市街地では国道 20 号（甲州街道）の八幡町―追分町間が通行止めとなりました。

(2)　地震と噴火

八王子における地震災害の記録は、中世から確認することができます。詳しい記録としては、元禄 16 年（1703 年）に発生した「元禄関東地震」が挙げられます。この地震は、「関東地震」としては大正 12 年（1923 年）の「関東大地震*」の１つ

*** 関東大地震**
関東大震災における地面の揺れや、揺れを引き起こした地下の岩盤の破壊現象。八王子で大きな揺れが記録された広域地震として関東大地震以前では、安政元年（1854 年）の「安政東海地震」がある。

前の地震で、地殻変動や津波の発生など、南関東全域に大きな被害をもたらしました。元八王子では、西明寺（明治元年〈1868 年〉廃寺）の本堂が倒壊したという記録があり、震度 6 強～ 5 強の揺れに見舞われたのではないかと考えられています。

近代では大正 12 年（1923 年）の関東大震災がよく知られています。この震災による八王子での被害は、建物の全壊 326 戸、半壊 874 戸で、死者 10 名、負傷者 8 名という記録が残っています。特に山地・丘陵の斜面の崩壊による被害が多く、当時の由木村では、全壊 169 戸、半壊 188 戸と市内でも特に甚大な被害が発生しました。

記憶に新しいところでは、平成 23 年（2011 年）の東日本大震災があります。この震災では、公共交通機関のまひによる帰宅困難者の発生や原発事故による放射性物質拡散への対応など、現代的な災害も表面化しました。

これを受けて、東京都では客観的なデータや最新の科学的知見に基づいた被害想定の見直しを行い、平成 24 年（2012 年）に「首都直下地震等による東京の被害想定」を東京都防災会議で決定しました。その中で想定されている地震は、「東京湾北部地震（M 7.3）」、「多摩直下地震（プレート境界多摩地震）（M 7.3）」、「元禄型関東地震（M 8.2）」、「立川断層帯地震（M 7.4）」の 4 つです。このうち、多摩直下地震では、市域の 40.3 パーセントで震度 6 強以上の揺れが想定され、本市に最も大きな被害を及ぼす可能性があります。

火山の噴火についても、八王子がその影響を受けた痕跡や記録が残っています。直近では、天明 3 年（1783 年）の「浅間天明噴火」に関して、浅間山の爆発的な噴火によって地震や鳴動が続き、八王子にも降灰があったことや、中山道が通行できなくなったことに伴い、甲州街道の通行が多くなった、との記録があります。また、市内の遺跡から宝永 4 年（1707 年）の富士山噴火による降灰と見られる痕跡が見つかっています。

火山噴火予知連絡会（昭和 49 年〈1974 年〉設置）は、今後 100 年程度の中長期的な噴火の可能性及び社会的影響を踏まえて「火山防災のために監視・観測体制の充実等の必要がある火山」として全国で 50 の火山を選定しています。その中には前述の浅間山のほか、八王子に被害を及ぼす可能性がある富士山と箱根山も含まれています。八王子では、溶岩流や火砕流などの直接的な被害を受けることはありませんが、広範囲な降灰に起因する様々な被害が想定されています。

(3) 火災

八王子での大規模火災は、文政 7 年（1824 年）の大火以降、明治 21 年（1888 年）、26 年（1893 年）、30 年（1897 年）に発生しています。中でも最大の被害をもたら

したのは、明治 30 年（1897 年）4 月 22 日の「八王子大火」でした。大横町から出た火事は、強風にあおられて瞬く間に市街地へと飛び火し、八王子町の 6 割以上を焼失する大火となりました。この大火により、3341 戸が焼失、死者 42 名、負傷者 223 名という被害をもたらしました。翌年には、大義寺（元横山町）の境内に「焼死者合葬之墓」と書かれた犠牲者供養碑が建てられています。また、このとき校舎が焼失した折田学校（現市立第三小学校）は、その校舎の再建のために高尾山の杉材が建材として寄付されたことから、高尾山薬王院有喜寺の名をとって「有喜学校」と称するようになりました。この火災以後、建物の屋根に使う材質の制限や道路の拡幅など、大規模火災に対する行政的な対策が採られています。

その後、昭和期には戦災による火災で中心市街地が大規模に焼失するなど、近現代の八王子は火災による甚大な被害に遭ってきました。現在でも年間で 140 ～ 200 件の火災が発生しています。

4. 歴史の変遷

今、私たちが八王子の歴史や文化を知ることができるのは、市民の財産である「文化財」が現在まで守り伝えられてきたからです。ここでは、それらの調査・研究などにより明らかになった歴史的事実を時代ごとに紹介していきます。

(1) 原始・古代

ア　旧石器時代（～約 1 万 6000 年前）

旧石器時代はちょうど氷河期に当たり現在よりも寒く、寒暖の差も激しい気候だったと考えられています。そうした環境の中、人々は人類最古の道具である石器を作り、狩猟を主体とした生活をしていたと考えられています。石器は石を加工して作られた道具で、珪岩やチャート、黒曜石（こくようせき）などの石が用いられました。関東ローム層と呼ばれる赤土の中に残されているわずかな石器などから、このころの八王子の人々が知識や技術を駆使した生活を営んでいたことがわかります。

市内最古の石器（多摩ニュータウン№ 402 遺跡）
【東京都埋蔵文化財センター所蔵】

八王子で最古の人の痕跡が確認された遺跡は、多摩ニュータウン№ 402 遺跡（松木）です。ここでは約 3 万 5000 年前のものと考えられる石器が見つかりました。また、寺前遺跡（谷野町）は市内で初めて発見された旧石器時代の遺跡で、昭和 45 年（1970 年）に郷土資料館に持ち込まれた黒曜石の石器が調査のきっかけとなりました。ここでは削器という刃の部分が鋭く加工された石器が発見されています。宇津木台遺跡群（久保山町一・二丁目ほか）、石川天野遺跡（石川町、大谷町）や下耕地遺跡（大谷町）、小比企向原遺跡（小比企町ほか）のほか、多摩ニュータウン地域など、市内各地から石器が発見されています。旧石器時代の遺跡は、丘陵地に多く分布しているのが特徴です。

イ　縄文時代（約 1 万 6000 年前～約 2400 年前）

このころになると日本列島も気候が安定して自然環境が次第に穏やかになり、人々の暮らしにも変化が生じます。気候の変化でカシやクリなどの植物が多く茂るようになり、これらの実を加工して食べるために土器が使用されるようになりました。この土器には縄目をはじめとする様々な文様が付けられているので「縄文土器」

と呼ばれています。

こうした植物の採集のほか、川や海で魚介類を捕る漁労活動も活発に行うなど、縄文時代の人々は狩猟以外にも積極的に食糧資源を開拓していきました。

八王子には豊かな自然に恵まれた台地や丘陵地を中心に、この時代の遺跡がいたるところに残されています。遺跡からは石器や土器のほかに数多くのユニークな土偶も発見されており、宮田遺跡（川口町）では、母親が赤ちゃんを抱きかかえているさまを造作した、当時の子育ての様子を思わせる土偶が発掘されています。

子抱き土偶（宮田遺跡）【国立歴史民俗博物館所蔵】

このころの代表的な遺跡に椚田遺跡群（椚田町ほか）があります。椚田遺跡群のうち椚田遺跡と神谷原遺跡からは、縄文時代中ごろ（およそ5000年前）の竪穴住居が多数発見され、居住の場として数百年間にわたって繰り返し利用されたことがわかりました。椚田遺跡は縄文時代中期の良好な集落跡として、昭和53年（1978年）に1万1046平方メートルが国の史跡に指定され、現在は遺跡公園として整備されています。

椚田遺跡から発掘された土偶

ウ　弥生時代（紀元前４世紀ごろ～紀元３世紀中ごろ）

大陸から伝わった、稲を育てて米を収穫して食べる文化と、それに伴う様々な技術や生活様式が拡散していく時代を弥生時代と呼んでいます。米作りに代表される弥生文化は北九州に始まり、日本列島を西から東へ伝わりました。青銅器や鉄器などの金属の道具もこの時代から使われはじめます。

八王子では、水崎遺跡（長房町ほか）や叶谷遺跡（叶谷町ほか）などに見られる中期の再葬墓が数例発見されていますが、大規模な遺跡は確認されていません。後期後半になってようやく集落が形成されはじめ、本格的に集落が展開するのは弥生時代末期のことです。八王子盆地周辺の台地や丘陵上に、この時期の集落遺跡が点在して発見されています。

宇津木向原遺跡の方形周溝墓

市内の代表的な遺跡として、弥生時代の代表的な墓制

である「方形周溝墓」の命名の元となった宇津木向原遺跡（宇津木町ほか）をはじめ、鞍骨山遺跡（みつい台一・二丁目）や神谷原遺跡（椚田町ほか）などがあります。

エ　古墳時代（3 世紀後半～ 7 世紀末）

3 世紀後半から 4 世紀にかけて、奈良盆地を中心とした国家形成の動きが始まります。そして 4 世紀後半以降、前方後円墳の分布拡大に見られるヤマト政権の影響力が、次第に東国にも及んできました。八王子を代表する古墳は北大谷古墳（大谷町）です。多摩地域はもとより多摩川流域の南武蔵地域でも最大の古墳で、地域の首長墓と考えられています。そのほか、6 ～ 7 世紀にかけて造られた古墳が点々と残されており、小宮古墳（久保山町一丁目）、船田古墳（長房町）、川口古墳（川口町）など市内で合計 11 基の古墳が確認されています。また斜面地を横に掘って造られた横穴墓も残されており、周辺には集落跡も発見されています。

船田古墳

古墳時代も後半になると、鉄製の農具が普及しはじめ、積極的な開墾が進められます。市内では中田遺跡（中野山王三丁目）や船田遺跡（長房町）が代表的な遺跡です。これらの遺跡の住居跡には、煮炊きするためのカマドの跡が残っています。

船田遺跡から出土した鉄製品

オ　奈良・平安時代（8 ～ 12 世紀ごろ）

和銅 3 年（710 年）、奈良の平城京に都が移されると、律令制の施行によって地方制度が整備されます。

八王子を含む多摩地域は武蔵国に含まれ、多磨郡と呼ばれました。武蔵国の国府（政務を行う施設）は現在の府中市に設置されます。国府の設置とともに、聖武天皇の勅命による国分寺（国分寺市）の建立によって、多摩地域は武蔵国の政治・文化の中心地となります。

八王子には、この時代の草創伝承を持つ寺社が幾つか見られます。高尾山薬王院有喜寺は、天平 16 年（744 年）、聖武天皇の勅命により東国鎮守の祈願寺として創建されたと伝わっています。このほかにも子安神社（明神町四丁目）は天平宝字 3 年（759 年）、鵜森神社（住吉神社、叶谷町）は寛平年間（889 ～ 898 年）、八王子権現社（元八王子町三丁目）は延喜 13 年（913 年）、八幡神社（元横山町二丁目）は延長 2 年（924 年）、

多賀神社（元本郷町四丁目）は天慶元年（938 年）、諏訪神社（諏訪町）は大治元年（1126 年）の草創伝承を有しています。

このころ成立したとされる日本最古の和歌集『万葉集』には、「赤駒を　山野に放し　捕りかにて　多摩の横山　徒歩ゆか遣らむ」と、八王子の代表的な地名「横山」の由来となった言葉が和歌に詠まれています。

一方で、集落の構造にも変化が訪れました。7 世紀後半は大規模な拠点集落が減少する代わりに、盆地内に小さな集落が点在するようになっています。

御殿山窯跡群から出土した須恵器

現在の稲城・多摩・町田・八王子の 4 市にわたる丘陵地帯では、武蔵国府や国分寺に瓦や須恵器を供給した古代窯の跡「南多摩窯跡群」が分布しています。そのうち八王子の御殿山地区に広がる御殿山窯跡群（鑓水、宇津貫町、七国一～三・六丁目）は、9 世紀前半から 10 世紀中ごろの約 120 年にわたり、須恵器生産を中心に操業した窯跡群です。国道 16 号バイパスや八王子ニュータウンの開発事業などを契機に、大規模な発掘調査が行われ、多くの窯跡や工房跡、住居跡とともに、製品として出荷されずに残されたと思われる大量の瓦や須恵器が見つかり、当時の様子を知る上での貴重な成果をもたらしました。

由比牧址碑（弐分方町）

平安時代になると、関東・中部地方では武蔵・上野・甲斐・信濃の諸国に御牧が置かれます。御牧とは、皇室の料馬を育てるために天皇や上皇などの命により開発され、延喜時代（901 ～ 923 年）以降、次第に公的な性格を持つようになった牧（牛馬の放牧地）のことで、「勅旨牧」とも呼ばれています。多磨郡には由比・石川・立野・小川の 4 つの御牧があったといわれ、後に小野牧が追加されています。御牧での馬の飼育は東国武士を育てる素地となったようで、小野牧の別当小野氏は、後に八王子を中心に勢力を持った武士団の横山党とつながりがあるといわれています。

(2) 中世

ア　平安時代末期～室町時代

横山党根拠地（八幡八雲神社内、都指定文化財）

12 世紀に入ると、八王子周辺でも古い地名に数えられる「横山」を名乗る武士、横山氏が現れます。横山氏は武蔵国南部から相模国にかけて一族が分布しており、横山党とも称される武士団を形成していました。八王子は有力な本拠地の一つです。

横山氏が本拠とした地域には 12 世紀半ばまでに船木田荘が成立します。船木田荘の範囲は八王子の浅川流域の一部と、大栗川流域から日野市域にわたる荘園です。文献資料では「横山荘」とも記され、荘園の成立には横山氏が関与していたと推測されますが、鎌倉時代初期の和田合戦で横山党の主要な人々が滅亡し、彼らの所領は没収されてしまいます。その後、船木田荘は鎌倉幕府の宿老大江氏一族の長井氏が戦国期まで支配します。長井氏は、所領の中に片倉城や椚田城（初沢城）を築いたと考えられています。

船木田荘には本荘と新荘の区分がありました。船木田新荘には市域北西部の川口川流域の河口郷や、谷地川流域の谷慈郷、北浅川・城山川流域の由井郷や横河郷、大栗川流域の由木郷などがありました。本荘は主に市域西部の山地を含む範囲と推定されます。これは、船木田荘が本来は林業を主体とした荘園として成立しており、のちに河川流域を中心に開発が行われ、新荘が成立したことを示すと考えられるためです。

河口郷では河口氏、由井郷周辺は由井氏、後に鎌倉御家人の天野氏など武士の存在が確認されます。船木田荘で開発を主導し、現地支配を行ったのは彼らだったのでしょう。室町時代には、横河郷に梶原氏の活動が見られるなど、現地の支配者にも変化が見られるようになります。

室町幕府成立後、幕府は鎌倉府を設置し、鎌倉公方を頂点として関東管領に補佐をさせ、関東を支配していました。しかし、次第に公方は幕府から独立する姿勢を示すようになります。また関東管領とも対立し、これが発端となり、関東は戦乱の時代を迎えます。このあと八王子に進出する大石氏は関東管領上杉氏の重臣で、武蔵守護代を務めていました。

15 世紀半ばに関東は戦乱の時代に突入し、16 世紀初頭には長井氏が滅亡、大石氏が八王子に勢力を伸ばし、浄福寺城や高月城、滝山城を拠点として支配を開始します。京都東福寺による船木田荘（横山荘）の支配の実態も戦乱の中で失われてい

きました。大石氏の支配地域は、小田原を拠点とした北条氏に引き継がれることになります。

イ　戦国時代

戦国時代、小田原に本拠を置き関八州に覇を唱えた北条氏は、初代の伊勢宗瑞（北条早雲）が関東管領上杉家の対立に乗じて南関東に進出していきます。二代氏綱、三代氏康、四代氏政、五代氏直までのおよそ100年の間に勢力を拡大させていきます。

北条氏が関東に進出していく過程で、氏康の三男氏照が八王子周辺を支配していた大石氏の養子となり、支配権を継承します。既に大石氏が拠点としていた滝山城などの城館や城下が整備され、本拠地小田原と、前線である北関東への中継地点として、また西隣の甲斐武田氏に対する要衝の地として位置付けられていきます。

氏照は、諸国の武将が時には骨肉の争いを繰り広げる時代にあって、小田原城の兄氏政、鉢形城の弟氏邦とともに、兄弟間で一度も争うことなく、互いに手を携え支え合って関東の安定を築いていったといわれています。このことが縁となり、八王子市・小田原市・寄居町は姉妹都市の盟約を結んでいます。

滝山城跡（国指定文化財）

永禄12年（1569年）、武田信玄が小田原城を攻める前に滝山城を攻撃し、北条氏照は防戦しています。このときの戦況を記した文書に氏照は「宿三口」へ軍勢を繰り出したとあることから、このころには滝山城下に町場が整備されていたと推測されます。現在でも滝山地区には「八日市」「横山」「八幡」の地名が残っていることから、近世八王子宿に続く三宿が成立していたと考えられています。

八王子城跡（国指定文化財）

その後、氏照は居城を八王子城に移します。時期については諸説ありますが、天正10年（1582年）以降、同15年（1587年）までには新たな政治的・軍事的拠点として使用しはじめたと推測されています。八王子城は急峻な地形を利用した要害部と、城主の居館を中心とした御主殿地区、家臣団の屋敷跡や寺院跡の伝承地

を含む根小屋地区及び外部の防御施設群で構成され、さらにその外側、現在の高尾街道沿い（元八王子町一・二丁目）には城下町地区の存在が推定されています。こちらにも街道の北から「八幡」「横山」「八日市」の地名が残っています。

要害部を擁する八王子城は、山城と呼ばれる形態を示していますが、同時期の城郭は一般的に平地に築かれる傾向にあるといわれています。氏照が深沢山を含む広大な城郭を構想した理由として、隣接勢力であった武田氏が織田信長によって滅ぼされたことにより、織田氏に対する軍事的な備えを必要としていた点が挙げられます。また北関東へ進出しようとする北条氏が領国内の広域を統治するための政治的拠点として、相応の権威を示す必要があったためと考えられます。八王子城が北条氏領国の支城の中でも最大級の規模を誇るのはそのためでしょう。

一方で、八王子城跡の出土品には文化や芸術に関わる品々を見ることができます。例えば中国製の染付磁器やベネチア産のレースガラス器が発見されているほか、青磁の高級調度品があります。これらは権威を示すために飾られたり、饗宴の際に用いられたりしたと考えられます。日常的に使用される食器や保存用の瓶なども出土しています。茶道具、香道具の遺物は、城内で茶の湯や聞香が嗜まれていたことを示しています。

ベネチア産レースガラス器

青磁の香炉

天正 16 年（1588 年）以降、八王子城は織田信長の後継者豊臣秀吉の進攻に備え、臨戦態勢を強化しながら修築工事が続けられていたようです。同時に北条氏と豊臣政権の交渉が続けられますが、決裂の後、天正 18 年（1590 年）4 月、豊臣氏は小田原城に向け大軍を動かします。同時に配下の前田利家・上杉景勝らに命じ、上野国・武蔵国の北条方の城を攻略させ、6 月 23 日、八王子城は激しい攻撃を受け 1 日にして落城してしまいます。

八王子城の落城は、小田原に籠城する人々に大きな衝撃を与え、開城を促すことになります。7 月 5 日に当主氏直が降伏し、11 日には氏直の父氏政と氏照が切腹、小田原北条氏は滅亡し、関東は新時代を迎えることになります。

(3) 近世

ア　近世初期

北条氏の滅亡後、徳川家康の関東入国により、関東では新たな時代が始まります。

八王子宿は、徳川氏の代官頭大久保長安の指揮の下、甲州道中沿いの横山村に宿駅を置き、八王子城下（元八王子町一～三丁目）の横山・八日市・八幡宿をそのまま

移して新しいまちがつくられたことに始まります。当初は代官の陣屋が集中する政治的な役割を担ったまちでした。代官とは年貢などの徴収や治安業務などを行う江戸時代の地方官で、陣屋とは代官が職務を行う場所のことです。八王子宿では次々と宿町が開かれ、八木宿・久保宿・嶋坊宿・本郷宿・小門宿・上野原宿・寺町・子安宿・新町・本宿・横町・馬乗宿を合わせて十五宿となり、現在の八王子市街地の原型となる八王子十五宿ができます。中でも横山宿･八日市宿は、公用の人馬を継立てる伝馬宿で、市を開く特権を持っていました。

大久保長安陣屋跡（市指定文化財）

八王子の代官は、大久保長安を代官頭として八王子に在住し、武蔵国とその周辺地域の在地支配に当たっていました。この体制は、17世紀末の五代将軍綱吉の時代まで続きます。

一方で、八王子は軍事的に関東の西の守りの要となる重要な土地であったため、八王子城落城後、徳川氏は甲斐武田氏の旧臣（小人衆とそれを束ねる小人頭）を再編成した郷士集団を八王子城下に配置し、周辺地域の治安維持に当たらせました。この集団はその後、文禄２年（1593年）に八王子宿の西側、現在の千人町に移住します。さらに、慶長４年（1599年）には関ヶ原の戦いに備え、大久保長安によって増員され総勢千人になります。このことから「千人同心」と呼ばれ、これが「千人町」の由来ともなっています。千人同心を束ねる10人の「千人頭」は、それぞれが100人の同心を率いる旗本として武士の身分を持っていましたが、そのほかの同心たちは、任務に就くときだけ武士としての身分が与えられ、平時は農民として「半士半農」の生活を営んでいました。

横山十五宿絵図
（新野家文書＝市指定文化財）

千人同心の武士としての役割（公務）の代表に「日光勤番」があります。この職務は、開幕の祖家康と家光を祀る日光山の防火と警備を行うもので、「日光火の番」ともいいます。千人同心が日光火の番を命じられたのは慶安５年（1652年）のことで、幕府が崩壊する慶応４年(1868年)まで1000回以上､216年にわたり続きました。時代によって変化はありますが､一度の任務で千人頭１名と同心50名が交代で、八王子から日光までの３泊４日の行程を歩いて移動し、職務に従事していました。

このことが縁となり、八王子市と日光市は姉妹都市になっています。

また、戦国時代末期、八王子には「松姫（信松尼）」が甲州から逃れてきています。松姫は武田信玄の娘で、永禄10年（1567年）、7歳のときに織田氏との同盟のため、信長の長男信忠と婚約しましたが、元亀3年（1572年）12月、同盟が破たんしたため婚約が破棄されました。信玄没後、兄仁科盛信に引き取られますが、天正10年（1582年）3月、織田氏の進攻により松姫らが身を寄せていた信濃高遠城が落ち、盛信は戦死します。松姫は末妹と幼い姪2人を伴い、甲斐国栗原の海洞寺へ逃れ、さらに陣場山（陣馬山）を越えて案下（上恩方町周辺）に至ったと伝わっています。のちに出家して信松尼と称し、武田氏の遺臣でもあった大久保長安の取り計らいで横山村御所水（台町二丁目周辺）に移住し、糸紡ぎや機織りを行いながら日々の生活を送ったといいます。武田氏滅亡後に甲斐を支配した徳川氏との関係も深く、養妹が家康に嫁ぐなど、徳川家康や武田氏遺臣たちの庇護を受けたといわれています。信松尼は臨終の際に、自邸を寺とするよう、出家の際に師事した心源院（下恩方町）の住職舜悦に遺言を残し、信松院（台町三丁目）が開かれました。正徳5年（1715年）には、仁科盛信の子孫によって信松尼の百回忌法要が執り行われ、このとき軍船模型2点が信松院に寄進されました。また、このころ作成された木造の松姫座像も現存しています。

千人頭の具足（市指定文化財）

木造松姫坐像（市指定文化財）

イ　近世中後期

17世紀末になると、代官の江戸引き上げが行われ、八王子宿にあった代官たちの陣屋が次々と払い下げられていきます。

八王子宿で開かれる市は、横山宿で毎月4日・14日・24日、八日市宿で毎月8日・18日・28日と、月6回開かれる六斎市でした。市では様々な商品が取引されており、八王子宿や周辺地域で生産した農産物や炭、薪、衣料品の太物や紬などとともに、肴や塩、穀類など、地元で生産されていないものもあったことから、様々な地域から商人たちが訪れ、商品を売買していたようです。江戸時代初期の六斎市は、特定の品目に集中しない雑市的なものでしたが、18世紀半ばを過ぎると次第に織物業が発展し、19世紀にかけて雑市とは別に織物市も開かれるようになります。

八王子宿で取引される織物は、周辺の村々で生産された品物のほか、甲斐・津久井・青梅などの織物もありました。八王子は染めた糸を使って模様を織り出す先染めの絹織物の生産地で、八王子で生産された織物だけでなく、八王子宿の市に集められ出荷された織物が「八王子織物」と呼ばれました。また、主に取引された織物が、太織縞、上田縞、黒八丈、青梅縞だったことから、八王子宿の織物市は「縞市」、織物商人は「縞買」と呼ばれました。

この八王子宿を通る甲州道中は、江戸時代の五街道の一つで、常時における幕府の公用通行は信濃高島藩、高遠藩、飯田藩の参勤交代、甲府勤番の交代などがあり、重要な役割を果たしていました。江戸時代後期になると大山（神奈川県）や富士山、高尾山へ向かう参詣者など、縞市でのにぎわいに加えて人々の往来も盛んになり、甲州道中最大の宿駅として八王子宿は大きく発展し、「桑都」の名が広く知られるようになりました。

原胤敦墓（左）と植田孟縉墓（右）（いずれも都指定文化財）

18 世紀後半、幕府が蝦夷地（北海道）の直接支配を行うようになると、千人頭の原半左衛門胤敦は蝦夷地の開拓と警備を幕府に願い出ます。

そして寛政 12 年（1800 年）、幕府の許可を受けた原胤敦は弟の新介とともに千人同心の子弟 100 名を率いて蝦夷地に渡りました。胤敦は白糠（現白糠町）に、新介は勇払（現苫小牧市）に、それぞれ 50 名を率いて入植します。このことが縁となって、八王子市と北海道苫小牧市は姉妹都市となり、白糠町とは小学生交流事業が行われています。

桑都朝市（『桑都日記』）【国立公文書館所蔵】

胤敦は蝦夷地から戻ると千人頭に復帰しましたが、しばらくした後、幕府から多摩郡の地誌編さんを命じられました。千人同心組頭の植田孟縉や塩野適斎が中心となって多摩の村々を調査し、文政 5 年（1822 年）に『新編武蔵風土記稿』多摩郡の部を完成させます。このほか、植田孟縉は『武蔵名勝図会』、塩野適斎は『桑都日記』をそれぞれ著しています。また、組頭の秋山佐蔵は蘭方医として蘭学の発展に尽くすなど、千人同心は文化事業にも貢献しました。組頭の松本斗機蔵は海外事情にも精通しており、日本列島の沿岸に頻繁に外国船が出現する状況を受けて、海防政策の提言書『献芹微衷』を著しています。

こうした八王子での文化的な動きは、江戸の文化の影響を受けながら、千人同心のほかにも様々な動きが見られます。女流俳人の松原庵星布（榎本星布尼）や小仏

関所の関守で国学者の落合直亮（おちあいなおあき）などをはじめ、狩野派や谷文晁（たにぶんちょう）の文人画を学んだ人物や、新選組で有名な天然理心流（てんねんりしんりゅう）などの剣術を修する者も現れます。

ウ　幕末期

幕末になると横浜が開港され、織物の一大集散地となっていた八王子宿は、輸出用生糸を横浜に運ぶ経由地としての役割も担うようになります。

安政６年（1859 年）の横浜開港で外国との貿易が始まると、生糸は輸出品の花形になりました。幕末から明治初期にかけて、多量の生糸が八王子の周辺から集められ、横浜へと運ばれました。この横浜へのルートは、郷土史家の橋本義夫（はしもとよしお）によって昭和 30 年（1955 年）ごろに「絹の道」と名付けられ、昭和 32 年（1957 年）には大塚山（鑓水）に碑が建てられています。絹の道が通る鑓水には、当時、何人もの生糸商人がおり、現在でも商人たちの活躍をしのぶことのできる痕跡が残されています。

絹の道（市指定文化財）

また、この幕末期には、現代に伝わる祭りや伝統芸能などの淵源を見ることができます。

(ア)庶民の娯楽「八王子車人形」と「説経節（説経浄瑠璃）」

車人形は伝統的な人形芝居の一つで、「ロクロ車」という底に３つの車輪がついた箱車に腰かけて、一人で一体の人形を遣います。江戸時代末期に現在の埼玉県飯能市出身の初代西川古柳（にしかわこりゅう）（山岸柳吉 1825 ～ 1897 年）が考案し、明治時代前期には多摩地域とその周辺に庶民の娯楽として広まりました。映画やラジオなどの登場で娯楽が多様化し、娯楽としての芸能は衰退しますが、現在、下恩方町に拠点を置く西川古柳座のほか、奥多摩町と埼玉県三芳町で伝承されています。八王子車人形は、東京都の無形文化財に指定されており、国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選定されています。

説経節は、仏教の教えを説いたものが次第に音楽や芝居などと結びついて民衆芸能化した語り芸の一種です。やがて義太夫節など他の語り芸におされて衰退しますが、寛政年間（1789 ～ 1801 年）に初代薩摩若太夫（さつまわかだゆう）によって再興され、のちに薩摩派、若松派の系統にわかれて埼玉や多摩地域に伝わります。八王子では薩摩派の説経節が写し絵や車人形などの地語りとして上演されたほか、単独でも若者の娯楽として

昭和始めごろまで盛んに行われていました。現在、薩摩派・若松派ともに「説経浄瑠璃」として東京都の無形文化財に指定されています。

（イ）八王子の山車

現在、八王子の中心地域である甲州街道沿いの市街地で８月上旬の週末に「八王子まつり」が開催されています。八王子の中心市街地の祭礼は、江戸時代に始まったと推定され、東部の八幡八雲神社の祭礼を「下の祭り」と称して７月に、西部の多賀神社の祭礼を「上の祭り」と称して８月に、それぞれ夏の大祭として執り行い、神輿渡御や山車の巡行が行われていました。

八王子の山車は、江戸の天下まつりで曳かれた山車を参考にして地元の宮大工が建造したとされ、山車に彫刻を施す「彫刻山車」が特徴の一つとなっています。その彫刻は白木彫りが主流で、手法は平彫り、丸彫り、籠彫り等、多様性に富んでおり、細かい彫りが多くあります。山車は江戸時代後期から昭和初期にかけて甲州街道沿いの八王子の宿町で盛んに建造されました。初期は江戸の影響を受けた人形山車が見られましたが、明治時代になると、道路に電線が張られて山車に人形を乗せることができなくなっていき、鉾山車や堂宮形式の山車が建造されています。

（ウ）木遣

八王子の木遣は江戸木遣の系統で、現在は鳶職で結成している八王子消防記念会によって保存･継承されています。元は元治年間（1864 ～ 65 年）に江戸の「本郷政」と呼ばれた木遣師によって伝えられたといわれ、建築現場の地形、上棟式、祭礼の神輿渡御、山車出発、出初め式、葬儀などの際に唄われています。現在、伝承されている曲目は、真鶴・手古（梃）・棒車・小車・のぞき・田歌・遠が禰・清念寺・駅路・山椒の木（三性の木）・どんしょめ・黒鐘・酒田・越後・虫づくし・巻木遣・土佐の 17 種類です。

（4） 近現代

ア　明治期

明治維新後、明治４年（1871 年）の廃藩置県を受けて、八王子宿をはじめとした八王子の村々は、明治５年（1872 年）に神奈川県に移管されます。

明治 11 年（1878 年）の南多摩郡設置と八王子町内への郡役所（本町）開設を経て、明治 22 年（1889 年）の市制・町村制施行により、現市域を構成する１町９村が誕生します。この年には甲武鉄道（現 JR 中央線）の新宿―八王子間が開通しています。明治26年(1893年)には多摩地域が神奈川県から東京府へ移管され、明治41年(1908

年）には横浜鉄道（現 JR 横浜線）八王子―東神奈川間が開通しています。

明治 26 年（1893 年）と同 30 年（1897 年）の 2 度の大火で八王子の市街地は大部分を焼失してしまいますが、これを契機に大規模な道路改修を実施し、復興を進めました。

教育面では、明治 5 年（1872 年）に「学制」が発布され、身分や性別の区別なく国民皆学を目指した学校制度が定められます。学制発布以降、八王子でも今の小学校の原型となる初等教育機関が各地に開校しました。

明化学校跡（現戸吹町会館）
学制発布後、明治 9 年（1876 年）に創立

中等教育においては、織物の品質向上を目指し、八王子町では織物関係者により明治 20 年(1887 年)に「八王子織物染色講習所」が開設されますが、明治 28 年（1895 年）には実業学校「私立八王子織染学校」へと発展します。その後、明治 36 年(1903 年)に東京府に移管され「東京府立織染学校」(のちの都立八王子工業高等学校、現都立八王子桑志高等学校に統合）として開校します。織染学校は他県からも進学者があり、“織物のまち”八王子の象徴的存在でした。

また、女子教育においても、横川村（現横川町）出身の横川楳子（1853 ～ 1926 年）が私財を投じて明治 25 年（1892 年）に「私立八王子女学校」を設立し、女子教育の普及に尽力します。楳子はのちに、この女学校を東京府に寄付し、多摩地域初の中等女子教育機関「府立第四高等女学校」（現都立南多摩中等教育学校）として明治 41 年（1908 年）に開校します。

イ　大正期・昭和（戦前）期

八王子町は、大正 6 年 (1917 年) 9 月に多摩地区で初めて市制を施行し「八王子市」となります。さらに、大正 9 年（1920 年）には、市内 3 校目の府立学校となる府立第二商業学校（のちの都立第二商業高等学校、現都立八王子桑志高等学校に統合）が開校し、「商工都市・八王子」を支える人材輩出の教育機関が整います。また、先に開校した府立織染学校では、このころになると入学者を全国から受け入れるまでになり、府立第四高等女学校でも、教育の普及の影響もあり、数年間で定員を大幅に増加させるほどの人気校となります。そのほか、「八王子和洋裁縫女学院」（大正 15 年〈1926 年〉、現八王子実践高等学校）や多摩勤労中学（昭和 3 年〈1928 年〉、現八王子学園）もこのころ開校します。

大正 12 年（1923 年）9 月 1 日に発生した関東大震災では、被害は少なかったものの、家屋の倒壊などが見られました。大正 9 年（1920 年）に竣工したばかりの

八王子織物同業組合の事務所（鉄筋コンクリート造）も、大きく損壊しました。また、八王子の中でも震源に近い由木村では、村役場の玄関の倒壊や道路の破損があり、小学校も使用できない状況になったといわれています。

大正 14 年（1925 年）には、玉南電気鉄道（現京王電鉄）により東八王子駅（現京王八王子駅）と府中駅間が開通すると、交通の利便性がさらに高まり、大正末期から昭和初期の全国的な観光ブームも相まって、高尾山周辺エリアにも観光地化の波が訪れます。

そうした折、大正 15 年（1926 年）に大正天皇が崩御し、天皇陵を歴史上初めて東日本に造営することが決まり、その地として八王子の御料地が選ばれます。翌昭和 2 年（1927 年）、武蔵陵墓地に大正天皇陵「多摩陵」が造営されると、全国から参拝客が訪れました。増大する参拝客に対応するために交通も整備され、高尾山や武蔵陵墓地周辺は観光名所としても全国に知られるようになり、多くの観光案内絵図や絵はがきが発行されています。甲州街道のイチョウ並木は、多摩陵完成を記念して昭和 4 年（1929 年）に宮内省（現宮内庁）により植栽されたもので、90 年以上の年月を経た今でも、市街地と高尾山などの山並みをつなぐ美しい景観を作り出しています。

大正天皇陵「多摩陵」（武蔵陵墓地）

高尾山の玄関口ともなった中心市街地は、昭和期に入ると甲州街道を路面電車が走り、街道沿いに建てられた鉄筋コンクリート造の店舗には映画館やカフェーなど、若者が楽しめる場所もできました。

その後、八王子市は昭和 16 年（1941 年）10 月 1 日、市制施行後初となる合併を小宮町と行いますが、直後の日米開戦により戦時体制へと様相を大きく変化させます。

ウ　昭和（戦中・戦後）期

昭和 16 年（1941 年）12 月 8 日の真珠湾攻撃により日米開戦となり、国益最優先のもと、市民は忍耐と不自由な生活を余儀なくされました。八王子の織物工場も軍需工場の下請けへと転換させられていきました。また、八王子は都内の子どもたちが空襲を逃れるための疎開先ともなりました。

太平洋戦争の末期、昭和 20 年（1945 年）8 月 2 日未明の B29 による八王子空襲で旧市街地の 8 割以上が焼失し、約 450 名もの尊い命が奪われました。

戦後の復興は、被災した住宅と小学校の再建に加え、新しい学校制度による新制

八王子空襲焼け跡写真原板（市指定文化財）

中学校の建設が急務となりました。八王子市は新たなまちづくりの中で、昭和 30 年（1955 年）には、横山・元八王子・恩方・川口・加住・由井の周辺 6 か村と合併し、昭和 34 年（1959 年）には浅川町と合併、昭和 39 年（1964 年）には由木村と合併し、現在の市域が形づくられました。新しい八王子の船出を祝し、市民相互の連帯を深めようと、昭和 36 年（1961 年）に第 1 回市民祭が盛大に開催されました。

戦後のモノ不足の中で、八王子の織物業界は「ガチャ万」と呼ばれる好景気を迎え、徐々に復興を遂げていきます。昭和 30 年（1955 年）に開発された紋ウールが大ヒット商品となり、これにより全国屈指の織物産地に名を連ね、再び“織物のまち”としての地位を築きました。

昭和 30 年代後半（1960 年代）になると、経済成長による首都圏の人口増加に伴い、都心部を中心に住宅不足が深刻になります。その影響で東京郊外の多摩丘陵は宅地開発が進みます。昭和 38 年（1963 年）に新住宅市街地開発法が公布されると、多摩ニュータウンの開発が始まりました。民間による開発事業も行われ、昭和 40 年（1965 年）から、京王高尾線の建設とともにめじろ台の開発が始まります。この時期、大学の進出や工業団地の開発、工場の誘致なども行われています。

昭和 39 年（1964 年）に開催された東京オリンピックは、戦後復興の象徴となりました。八王子市は自転車競技の開催地になり、多くの市民がボランティアとしてまちの美化やレセプションの開催に協力し、また市民による「オリンピック奉仕隊」が結成され、通訳班・救護班・通信放送班に分かれて大会の運営を支えました。

市内で開催された東京オリンピック自転車競技

昭和 40 年代にかけて、人口も急激に増加し、中央自動車道の開通や京王高尾線の開通、私鉄・国鉄の快速・特急電車の運行など交通の便も充実します。多摩ニュー

タウンやめじろ台、南陽台、みつい台といった住宅団地への入居も始まり、昭和40年（1965年）に人口20万人だった八王子市は、昭和58年（1983年）には40万人を超える都市になりました。

エ　平成期

平成元年（1989年）に「八王子ニュータウン（八王子みなみ野シティ）」の建設が始まり、平成7年（1995年）には市の人口が50万人を超えました。

かつて絹織物のまちとして栄えた市内の産業構造も大きく変わり、時代の移り変わりとともに、精密機器など先端技術分野を中心とした製造業が発達しました。八王子は、広域多摩地域（埼玉県南西部・東京都多摩地域・神奈川県県央部）の中心に位置し、約1600もの製造関連企業が集積しています。

平成19年（2007年）に発行されたミシュランの日本版旅行ガイド「MICHELIN（ミシュラン） VOYAGER（ボワイヤジェ） PRATIQUE（プラティック） Japon（ジャポン）」で三ツ星観光地に選ばれた高尾山は、国内外問わず、多くの登山客が訪れる山となりました。また同年、都内初の道の駅として「道の駅八王子滝山」が開業し、八王子を訪れる人々に八王子産の農作物が広く提供されるようになりました。

平成26年（2014年）には首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の市内区間がすべて開通し、平成28年（2016年）に八王子西インターチェンジがフル機能化するなど、周辺都市とのアクセスが向上しました。

平成27年（2015年）に東京都初の中核市となり、平成29年（2017年）には市制100年を迎えました。人口58万人の多摩のリーディングシティーとして、21の大学等（大学・短期大学・高等専門学校）を抱える学園都市として、発展を続けています。

ミシュランガイドの“三ツ星”観光地に選出された高尾山

まちの記憶 1

自由民権運動

自由民権運動とは、明治 10 年代に自由平等の人権意識に目覚めた人々が言論活動を通じて憲法制定や国会開設などの要求を掲げて全国的に広がった政治運動です。

八王子地域の自由民権運動は、明治 13 年（1880 年）に第十五嚶鳴社（おうめいしゃ）が設立されたことが出発点になり、キリスト教や西洋の思想・学問などに接した人々によって自由民権運動が広がり、その担い手を輩出しました。農村部と都市部、商工業者層と豪農層など、地域や担い手によって運動のあり方は様々で、上川口村(現上川町)では五日市憲法草案を創った五日市の民権運動と人的なつながりがありました。また、運動を多くの庶民に知ってもらうために、八王子車人形などの伝統芸能にも「自由」の文字が表現されました。

八王子の自由民権運動の痕跡は、車人形の衣装や石碑等、今も市内各所に残されています。

「自由」の羽織をまとった車人形

“近代日本は先ず元八王子より輝いた”と刻む「先覚之碑」（泉町）

まちの記憶 2

八王子の戦跡

昭和 20 年（1945 年）8 月 2 日未明、八王子は大規模な空襲を受け、中心市街地の大部分が焼け野原となり、多くの尊い命が失われました。戦後、先人たちの努力の積み重ねにより八王子は復興を遂げましたが、終戦から 70 年以上の時を経た今も、八王子空襲をはじめとする、先の戦争の爪痕が残る場所があります。

八王子市では、戦争の記憶を風化させずに未来に伝えていくために、『戦跡マップ』を作成して公開しています。マップでは、市内に残る主な戦跡として、①大和田橋の焼夷弾（しょういだん）跡、②クスノキ、③イチョウ並木、④ランドセル地蔵、⑤乾晨寺（けんしんじ）の山門、⑥陸軍幼年学校、⑦湯の花トンネル、⑧浅川地下壕、⑨JR 高尾駅の銃撃痕、⑩十二社神社、⑪戦災死没者之墓、⑫市戦没者慰霊塔を紹介しています。

八王子市戦跡マップ（平成 30 年 7 月発行）

まちの記憶 3

八王子のとんとん昔話

八王子には、魅力のある伝説や昔話がたくさんあり大切に語り継がれてきました。その中から２つのお話をご紹介します。

まず、小泉八雲（こいずみやくも）の随想集にも書かれたことで、海外にも知れ渡ることになった昔話「生まれ変わりの勝五郎（かつごろう）」。

主人公、小谷田勝五郎は、中野村（東中野）で生まれました。文政５年（1822年）11月、勝五郎が８歳になったとき、「自分の前世は、程窪村（ほどくぼむら）（日野市程久保）の須崎藤蔵だった」と言いました。藤蔵は勝五郎が生まれる５年前に疱瘡（ほうそう）に罹（かか）り、わずか６歳で亡くなった人物です。勝五郎は、自身の前世という藤蔵が、疱瘡に罹って亡くなった事やその家族構成などを詳しく語ったそうです。勝五郎の両親は、この話が本当かどうか確かめるために、藤蔵が住んでいたという程窪村を訪ねたところ、藤蔵は６歳で亡くなった事や、家族の事、さらには生家の周りの様子の事など、勝五郎が前世の記憶として語った内容が一致したというのです。

勝五郎の体験話は、『勝五郎再生前世話』（池田冠山著）、『勝五郎再生記聞』（平田篤胤著）として出版され、江戸中に広く知れ渡ることとなり、『勝五郎再生記聞』は、時の天皇と上皇にも上覧されました。

もうひとつ、長池公園（別所）にある長池という池にまつわる「浄瑠璃姫伝説」。

あるところに、子宝に恵まれなかった武家の夫妻がいました。夫妻が仏像に子どもが授かるようお願いしたところ女の子が生まれ、「浄瑠璃姫」と名付けられました。浄瑠璃姫は両親が子宝を祈った仏像を大切にして、武家に嫁ぐ折には仏像も一緒に持っていきました。しかし、当時は戦乱の世、浄瑠璃姫の夫も例外なく戦に出向き、討ち死にしてしまいました。夫を亡くした浄瑠璃姫は、深い悲しみと共に仏像を抱いて長池に身を投げて亡くなってしまいました。

その後、蓮生寺（別所）の僧侶が長池のほとりを歩いていると、池の中で光るものがあることに気づきました。引き上げてみると、浄瑠璃姫が抱いて沈んだあの仏像でした。僧侶はその仏像を寺に持ち帰り、大切にお祀りし、浄瑠璃姫の冥福を祈ったそうです。

長池にまつわる悲しい伝説ですが、浄瑠璃姫の名をとった「浄瑠璃祭り」が、地域への愛着と住民相互の連帯感を深めるための大切な行事として催されています。

市内の各地域に伝わる魅力的な伝説や昔話は、語り部とともに未来に残さなければならない市民の宝物です。